



羅本名報傳

九

還
2501
10-9

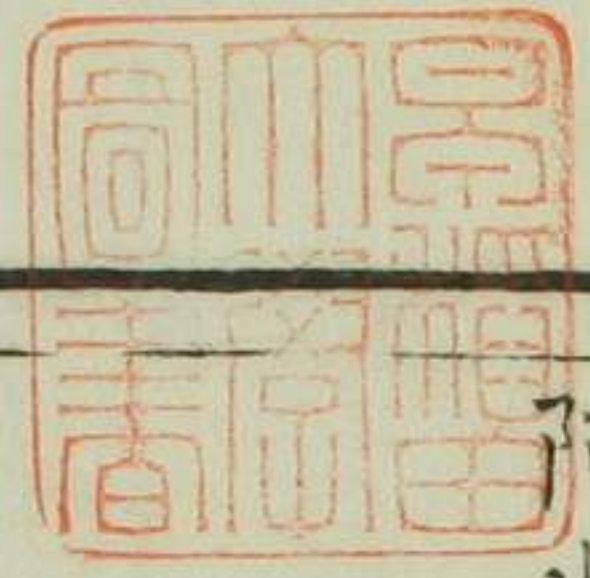


遠
2501
10-9

心
高
集
海
歌

本
尾
銀

北
邨
芳



河也可之譚卷之九

法橋玉山戲作并重

葛の葉龍宮城より還る物結

百舌の敷をくらり清原乃人ハ廿年月おらね説の

主の仇は安奈が許まいたしあわとあせぬふいでで

らの浮木の痛も時おねあす川星をもとる力の

うああ嬉しく物もとりぢえハ彼一所まけて是るふ

九郎ごらよ搦やとる仇人ハ悪右衛門尉をけは

三
卷
之
九

いど
あやら
しう
あま
ひく
百舌の敦茅主の仇を報ふ



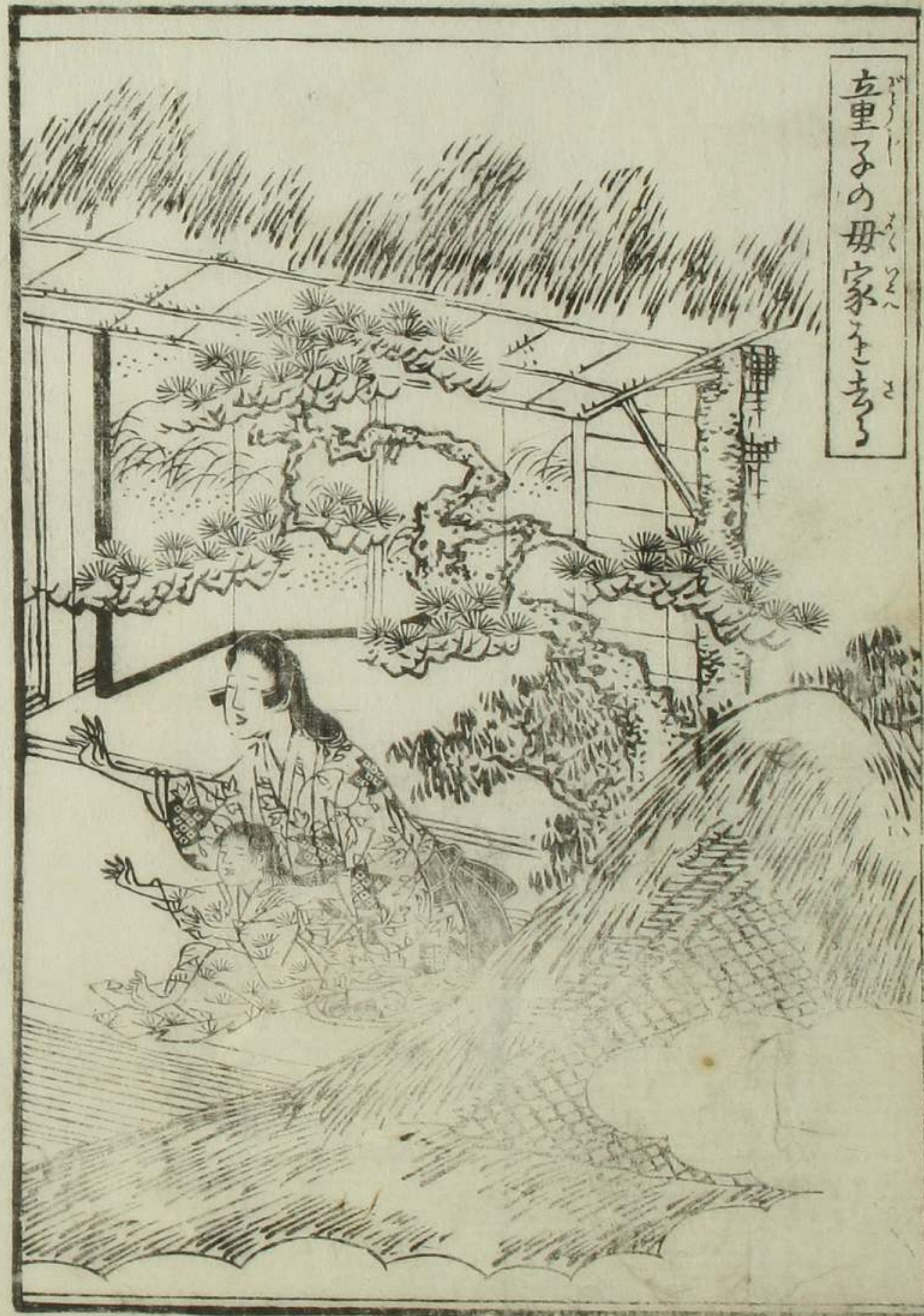
しつゝ今も家あり寝ぬ喜まよ添乳せ
一かきおけしほむいひの化乃馬想ハ
しつゝ家より帰るまといふも喜も安奈が
この鎮も家より帰るまといふも喜も安奈が
この鎮も家より帰るまといふも喜も安奈が
の館も縁ありし夜盗賊いふも喜も安奈が
馬も縁ありし夜盗賊いふも喜も安奈が
しつゝ今も家あり寝ぬ喜まよ添乳せ

しつゝ今も家あり寝ぬ喜まよ添乳せ
一かきおけしほむいひの化乃馬想ハ
しつゝ家より帰るまといふも喜も安奈が
この鎮も家より帰るまといふも喜も安奈が
この鎮も家より帰るまといふも喜も安奈が
の館も縁ありし夜盗賊いふも喜も安奈が
馬も縁ありし夜盗賊いふも喜も安奈が
しつゝ今も家あり寝ぬ喜まよ添乳せ



よしより来顔も容も若くはおかしき女ありし
くは内以持野狐の首より髪を仕りおを遊
さん結構もろくお形とありはし主きくは年
目とせんか鋤りあげ打んとし葛の葉叫ん
のよまらも生し師方の妻も女もあやしき
見しはめりお身よは日陰あり衣服よ六縫りあり
くしてお身よかえりも其女よ遊せま入自り怪しき者
ハ露る身しといふ所へ安奈を家の童僕一人走りて

葛の葉の君乃とくたまひぬし主きおのむつ
かせおの世町よも何とといひたふし留せ
たまへといふ安奈再び驚きこハ物のあやしきおの
中には例のある事くは葛の葉をさへて走り
留るはは入る主き子の葛の葉をさへて嬉し気を取
まらぬおの乳房の細くて香もあつたよといは
まらぬし止ら透るもやあし安奈ハ主き見
りる力を操りし其所よあしぬ彼所よハ居ぬし



立里子の母家を去る

伝者の森乃并ある也。非情石木あるべしと云ふは思ふ
 ありけるもあらずぬらぬ。孰くふを悲しませんとそのあは
 る見を便あはしむもあはて。喜あはしむるもあはてし
 とあるハ恨も或ハ歎と思愛の涙もあはれ難きも強りよ
 ころし骨のぬらうハ中々あはれぬ人の方かあはて
 かりし涙あはしむるもあはて

北邨芳

貸尾銀

文可志譚卷之九 終

是、平、下、少、高、の
 真、子、成、心、也

